

永井荷風と都市景観

——アンリ・ド・レニエのヴェネチア観の影響——

赤瀬雅子*

近年、少壮の研究者オーギュスタン・ベルク (1942-) ¹⁾の業績にみるように、都市の、あるいは多様な特質を持つ地方の景観の、比較文化的・比較文学的考究が目立つようになってきた。それは十数年前に盛んであった都市論を超えて、更なる深みを持った精緻な考察である。

この小論では、永井荷風 (1879-1959) がその生涯の大部分を過ごし、愛さざるを得なかった東京と、アンリ・ド・レニエがパリに期待することをせず、ヴェネチアに見ようとした理想化された都市とを考察して、永井荷風におけるアンリ・ド・レニエの影響の深さを見たい。

戦前の、手堅いが今となっては古めかしい文芸批評の中で、永井荷風・芥川竜之介 (1892-1927)・久保田万太郎 (1889-1963) 等は、都会派文学者といわれた。彼らの共通項は、確かに、東京で生まれ育ち、この首都を愛さざるを得なかったことである。彼らはこの首都を流れ、山の手と下町を分ける川、隅田川を一様に愛している。

芥川竜之介と久保田万太郎は下町の出身であり、その生活圈の中に隅田川は自然に入っていた。芥川の『河童』の中の、河童の国から帰ってきた憂鬱な男の許を、夜毎訪れるという河童達は、この河から来るのである。また万太郎の得意とする主題である噺家達は、この河の辺でのみ生き活きと生活している。河童達にも噺家達にも、彼らを創造した芥川にも万太郎にも、隅田

* 本学文学部

キーワード：ヴェネチア

川の畔は、比喩的に云えば、自分の庭の中ともいうべき、熟知している場所であった。

荷風はこの二人とは異なり、典型的な山の手の子である。高級官僚から日本郵船上海支店長となった父永井禾原（1852-1913）は、明治期の著名な漢詩人でもあったが、長男が小説家・戯作者・噺家・講談師の類になることを許さなかった。

随想「十七八の頃」にみられるように、荷風がとにかく言葉を操る職業に就きたいと願い、その修行をすべく試みたことは、すべて禾原には秘密裡に行われたのである。

荷風は噺家としては朝寝坊むらくに、講談師としては松林伯円に、戯作者としては福地桜痴（1841-1906）に、小説家としては広津柳浪（1861-1928）に、それぞれ就いた。

この苦しい修業時代に、荷風は努めて下町の子になろうとする。そして努めて隅田川にも親しんで行く。

荷風が十七八の頃から愛読していた為永春水（1790-1843）の『春色梅暦』の二十四齣より成る本編の第十五齣の冒頭をみよう。脇役の娘お蝶の登場である。

住ば繁花の諺も、今は誠の並家、鄙にはあらで雛人形の、姿に等しき美婦人の、隣垣歩行は梅が香の、伝う堤の春の風、竹屋も呼で向越、自由自在の釜の湯が、風雅と洒落た茶会亭に、何某隠居何の寮と、榎木の垣根建仁寺、柴の戸漏るる鶯の、声うるはしき初日影、朝湯が出来るを自慢とは、すこし開けぬ片折戸、密と立出ねむそふな、顔に完爾愛嬌を、こぼせし水か薄氷、駒下駄ならず田圃道、音さへ高き左り袂は、小梅あたりの名取の娘、通ひ稽古の朝がへり、所かはれどかはらぬは、根下髭鳴田の当世風、品やさしきはおのづから、江戸者の隅田川、（後略）

下町の隅田川沿いの家の二階で、心ゆくまで、『春色梅暦』に代表される

ような人情本を耽読することが、十七八の頃の荷風の理想であった。また現実の荷風が、朝寝坊むらくの弟子であった前座時代に、寄席がはね、師匠の用事を終えて帰る途次、囃子方の娘と逢い引きをしたのも、隅田川の畔であった。荷風は旧制中学時代、かなり長期の入院をし、蓮という看護婦に初めて恋した。雅号もその名から取ったというのは周知のことであるが、この恋は実らずに終わる。

父禾原からみれば、不肖の長男ではあったが、禾原自身、尾張藩藩校・大学南校・プリンストン大学で学んだ体験から、実学を身につけさせるためにアメリカにやろうと決意する。そしてアメリカからすぐにでもフランス赴こうとの魂胆から、父の言に従った荷風の渡米が実現したのは、1903年9月、荷風二十三歳の時であった。

禾原は詳しくは知らなかったが、渡米以前、エミール・ゾラ（1840-1902）の受容では、作風が大衆文学的であった小杉天外（1865-1952）を併せ考えたとしても、荷風は既に第一人者であった。ことに渡米の年1903年5月に刊行された『夢の女』はその主題も後年の荷風を思わせるもので、傑出している。

『夢の女』のヒロインの浪の行くところにはすべて水がある。没落士族の娘に生まれ、自身はおろか、父母と同胞の生活が肩にかかった浪は、妾・娼妓・待合の女将と、転落の生活を送る。妾時代には娘もできた。娼妓時代、売られた先は洲崎である。客の一人に無理心中を挑まれて客は死ぬ。それから後は売れなくなってしまったが、身を売ったお蔭で家族が一息つくことができた昔を、浪は忘れない。とは云っても、待合の女将に過ぎない境遇ではある。秋の十三夜、兜町の人らしい若い客達の酔狂に合わせて、余儀なく、娼妓時代の知り合いも多い洲崎に、浪は早舟に乗って繰り込む。

「君。いくつ橋を越すんだらう。お神さんは知つてさうなものだな。あの圓い橋、あれア何て云ふんだ。」

「私もさつぱり知らないんですよ。何年と深川に居たつて今だに一人ぢ

や洲崎へ行く道なんぞは分らない位ですもの。真実に淋しい川ですねえ。」

「さうさ、チョンと道具が変わると、音羽屋の芝居にやアよく斯う云ふ景色がある……」と男も今は自然と言葉少く暫くは行手の川筋を眺めた。

真直な一条の流れは、月明の下に秋の潮を湛へて絹を敷いたやうに輝つて居る。一同を載せた早船は船頭の操る櫓声に連れて、黄金を砕くが如き小波を立てつつ進んで行く。明い夜の空に高い屋根を並べた倉庫の蔭や、太鼓の様に圓い板橋の下、さては低い岸に沿うて夜泊りをして居る荷船の傍を過ると、深く苦を下した中には、船頭が酒に酔ッぱらつて高声に云ひ罵つて居る。水に臨んだ人家では大分裏の窓を明けたまま、矢張り此の明月を賞して居るのであらう。意気な音締の三味線を弾いて居る処もある。向の方から同じ早船の船頭がお客を廓へ送り込んだ帰りの空櫓を押しながら、摺れちがひに、其の唄つて来た船歌の声を止めて互に言葉を掛け合つて行き過ぎる。橋の上には欄干にもたれて其の下を通る舟を見ながら話をしてゐる男女もある。

殊に化政期（1804-1830）よりこのかた、風流を解する江戸人達は、江戸の河川を、この上ない遊びの場と捉えた。滝亭鯉丈（未詳-1841）の著わした、太平の世を遊び暮らすことしか考えていない『花暦八笑人』の登場人物達も、夏は「両国 川の涼ぶね」²⁾で狂態の限りを尽くして遊ぶ。

一説に滝亭鯉丈は、為永春水の実兄であったともいわれている。この説の真偽はともかく、二人が親しく行き来していたことは確かである。戯作者であると同時に寄席芸人として音曲噺・都々逸等をやっていた鯉丈と、出版業・講釈師の体験を持ちながら戯作者の第一人者となった春水と、彼ら二人の経歴は、十七八の頃の荷風がそのまま真似し、辿ろうとした道であった。後年、荷風は春水の年譜を自ら編んでいる。なお習作時代の春水は、式亭三馬（1776-1822）・柳亭種彦（1783-1842）に師事していた。春水は独立心が強かった。既に四十代ではあったが、1832年から翌33年にかけて、自信作『春色梅児誉美』³⁾の全巻を自力で刊行している。そして自らを「江戸人情本の元

祖」と称したが、確かに天保時代の一連の作品『梅暦余興春色辰巳園』・『春色恵の花』・『春抄媚景英対暖語』・『春色梅美婦禰』等を考えても、その名に恥じない。

彼ら戯作者が作品の構想を練りながら往き来した、隅田川に掛かる数々の橋・その川風・川面・そこに浮かぶ大小の舟・そしてそれらの舟の行く先にある遊里・そこでの歓楽等を、荷風は思い描いた。これより数年の後、とは云ってもまだ二十代であった荷風は『ふらんす物語』の第八編「おもかげ」の冒頭で、つぎのように述べる。

幾年以来自分は巴里の書生町カルチエエ、ラタンの生活を夢みて居たであらう。

イブセンが「亡魂」の劇を見た時はオスワルドが牧師に向つて巴里に於ける美術家の放縦な生活の楽しさを論ずる一語一句に、自分は只ならぬ胸の轟きを覚えた。プッチニが歌劇 *La Vie de Bohème* に於ては路地裏の料理屋で酔ひ騒ぐ書生の歌、雪の朝に恋人と別れる詩人ロドフルフが怨の歌を聞き、わが身もいつか一度はかかる歓楽、かかる悲愁を味ひたいと思つた。モオパッサンの小話、リツシユパンの詩、ブウルチエエの短編、殊にゾラが青春の作「クロオドの懺悔」は書生町の裏面に関する此の上もない案内記であつた。

カルティエ・ラタンは、ノートル・ダム寺院を背にして、シテ島からセーヌ河を渡ったサン・ミシエルの辺りから始まる。

時間も空間も、いわば凝縮され特別な意味を持たされた場所に感慨を抱くのは、大都会の住人の常である。中でも芸術家・学者等、わけても文学者にこの傾向がある。特に荷風にはその思いが強かった。

隅田川の畔に住み、震災前にはまだいくつも架かっていた脆弱な木の橋を往来し、時には猪木舟で川を上下する下町の生活に、荷風は憧れた。若い荷風が見ていたのは、明治三十年代の現実の東京ではなく、化政期の夢醒めや

らぬ、天保の改革直前の江戸であったともいえよう。両親に隠れて、寄席の前座を勤めていた頃には、山の手の家から下町の師匠の家の雑用をするため、日毎河を渡っていたのである。

これは若い荷風の半面である。荷風がその長い生涯を、韜晦的な言動はさしておき、一流の文学者として貫き得た理由は、他の半面である外国文学研究にあった。そして父禾原は、この不肖の息子の両面とも、終に深く識ることはなかった。

1897年秋、日本郵船会社上海支店長となって赴任していた父を、家族とともに上海に訪ねた後、荷風は高等商業学校附属学校清語科⁴⁾に入学する。上海滞在は三月足らずではあったが、この間、十七歳の荷風は、演劇の街であり、一面退廃の街であった上海の本質をよく見て、「烟鬼」を書いている。

当時から、この付属学校では、その科の言語と同時に、英語をたたき込まれた。漢詩人である父禾原の理想とした国の言葉を学ぶと同時に、英訳を通して欧州の文学を知ろうというのが、荷風の最初の意図であった。そして英訳を通してエミール・ゾラ（1840-1902）を識り、ゾラ受容の第一人者との評価を受けた、一連のゾライスムの色濃い作品を生むにいたったのである。

しかしゾラとの決別は意外に早い。前述した『夢の女』を頂点として、渡米後はゾラの影響は消滅して行く。そしてアメリカから、ついでフランスから巖谷小波（1870-1933）の許に送った、『あめりか物語』・『ふらんす物語』を構成する短編には、先ず、ギイ・ド・モーパッサン（1850-1893）の、ついでフランスのサンボリスト達の面影が濃厚にみられる。

荷風がモーパッサンを識ったのは、渡米以前である。「モーパッサンの石像を拝す」の中では、師に語りかける体裁をとって、こう述べる。

米国に向かつて日本を出ましたころには、やつとフランス文法の一通りを終えたばかりでしたから、私は彼の地へ上陸しましても、英語などは顧みず直ぐにフランス語の教師に就きました。（中略）

私は合衆国を通じて各地の大学に於けるフランス語教授の模様、またフ

ランス移住民の生活から、凡てアメリカに於けるフランスといふ事については普通の日本人よりも、いくらか委しいことを知つてゐるつもりです。

先生は編中人物の対話ばかりではなく、地の文章にも、写すべき周囲の光景を活かさうために能く俗語をお使ひになります。それを解釈しやうといふには、是非ともフランス人の生活に接近しなければならない。で、私は二年あまり紐育の或銀行に雇はれてゐる間、フランス人の家の一間を借り、朝夕フランス語を耳にすることを何よりの楽しみとしてゐました。

荷風のモーパッサンへの尊敬は、生涯変わることはなかった。またフランスのサンボリスト達への思いも、後、次第に興味を抱くに至るピエール・ロティ (1850-1923)、アンリ・ド・レニエ (1864-1936) への思いも、生涯醒めることはなかった。

荷風が大いなる関心を持ちながら、後に「捨てた」作家は、エミール・ゾラのみであろう。後年の荷風は、自分の生きるための姿勢は、日本の文化に魅かれながら、それをあくまで行きずりの人間として、冷ややかに見る姿勢をとったピエール・ロティに習わざるを得なかった。

波乱に富む年々、『断腸亭日乗』⁵⁾を書き続ける中に、荷風には、自己の文学とは何か、如何にあるべきかという問いが、自ずから湧いてくる。そしてその答えは、古典的ともいえる、抑制のきいた典雅な文学こそ文学の理想であるという、帰すべき所に帰したものであった。

上田敏 (1874-1916) の訳詞集『海潮音』⁶⁾と並び称される『珊瑚集』は1913年に刊行されたものであるが、アメリカとフランスでの勉学の成果が、ここに結実している。「一字一句、先生が手づからお書きになつた文字を、わが舌みずからで発音して見たい」ためにフランス語を学び、「どんな事をしてもフランスに渡り、先生がお書きになつた世の中を見たい」と決意し、「巴里の停車場へつくと、直ちに案内記によつて馬車を走らせ、先生の記念石像の下に身を投げかけ」る荷風であった⁷⁾。そしてその一方では、パルナシアン、サンボリストの研究に没頭する。前述したように、エミール・ゾラとの

決別は、荷風が渡米を承諾した時点にあったといってもよいであろう。留学の直接の成果でもあり、メモワールでもある『あめりか物語』と『ふらんす物語』の諸短編に最も色濃く影響している作家はギィ・ド・モーパッサンである。しかしその後にはピエール・ロティの影響の時代が、日本で生きる荷風の宿命としてやって来る。

アンリ・ド・レニエの影響はこれらよりもさらに深く、若い時代から読み込んだものが、年を経るにつれて深まって行く。紙面の許す限り、それを辿ってみよう。

『珊瑚集』には、レニエの訳詞が最も多く、10編を数える。はじめに出てくる「仏蘭西の小都会」⁸⁾は11聯より成るが、終りの三聯の荷風訳をみよう。

物のあいろもわかぬ夜、
歩む足音険しき道にとどろきて
疏水の水の音遙に聞え
吹く風運河の木立に騒ぐとき、

つかれて我は帰りくる街近く
ふと仰ぐあたりの家の窓。
帷幕さへなきガラス越し、ランプの壺に
石油の黄金色なす燈火の燃ゆるを見れば、

杖にて捜る夜の道、自づと足も急がれて、
われ思ひ知る。わが墳墓の国土、
懐かしき眼に闇の中よりいとも優しく
わが手をとりにて引くが如しと。⁹⁾

上田敏と比べた場合、荷風の訳詞は、非常に散文的である。荷風は十代に言葉を操って生きることを考えた頃から名文家であった。しかし専ら詩人・

訳詩家であるというような文学者の特質は持たない。

『珊瑚集』の持つ最大の意義は、いかなる詩人を採り上げたかであろう。

「仏蘭西近代叙情詩選」の副題を持つ『珊瑚集』38編に取り上げられた詩人は14名、採録の多い順に三人を挙げれば、アンリ・ド・レニエ10編、シャルル・ボードレル（1821-1867）7編、ポール・ヴェルレーヌ（1844-1896）同じく7編である。わが国の象徴詩は、ひとつには『珊瑚集』の影響を受けて誕生したといってもよいが、わが国の詩人達に衝撃を与えたものは、訳詩の巧みさではなく、その選択眼であったといつてよい。

“VILLE DE FRANCE”は、11聯より成っている。この詩の収録されている詩集“La Sandale ailée”は、1906年に *Mercure de France* より刊行された。先に挙げた第9聯と第10聯は、同年、同社より刊行され、レニエの代表作のひとつとなった“*Esquisses Vénitiennes*”のイメージにそのままつながる。

レニエは周知のように、ノルマンディーの古い港を持つ小都市、オンフルールの生まれである。“VILLE DE FRANCE”も、この古い小都市のイメージに、いくつかの、現実には重ならない都市風景が重なり合って構成されている。

レニエ研究者の草野貞之の技巧的な訳で、“*Esquisses Vénitiennes*”の序詩をみよう。

くちゑ

みのもは みどり あを あるは ねずみいろ
ほりわりのかずかず さてもまた ほりわりの
みのもを へめぐりゆきぬ ヴェネチヤのまち
サン・マルコより アルセナレまで

いりえの かぜは つよくして

おもひのままに かざみを なびかせ
なれが さちのめがみの めぐり めぐるよ
あはれ ドガナ・ディ・マアレ

アドリヤのうみの ほのかなる いぶき
やはらかき なれがゆび われに しめさば
フジナ あるは マラモッコオを

ゴンドラは やかたのかげに われらを ゆり
へさきなる くろがねは そのやいばもて
しじまを きりさきて ゆく
しほかぜのなかに ねむる しじまを

ひは あたたむ しきいしを
エスクラヴォンがかしのうへ
ほりわりの まがりゆくこみちも
いりくみしみちも われらは しる ヴェネチヤよ

みのもは きらめき なめいしは さけたり
かいと かいとは こだましあふ
レッツォニコが みやゐなる
すずやかの かげを すぎゆけば¹⁰⁾

愛してやまないヴェネチアの街のどこをも、そのすみずみまで自由に訪れる事の出来る歓びが、この序詩には溢れている。しかしレニエが愛したのはあくまで18世紀のヴェネチアであった。レニエ研究者の窪田般弥（1926-）は自身、“Esquisses Vénisiennes”の翻訳を試みた時、こう述べている。

小説『生きている過去』(1905)の作者である世紀末の詩人レニエ(1864-1936)は、十八世紀の自由なイタリアをこよなく愛した。彼にとって自由なイタリアとは、ヴェネチア共和国のイタリアであり、より具体的にはグアルディ、カナレット、ロンギといった画家たちが絵筆をふるい、自由人カザノヴァが活躍したヴェネチアである。

現代思想が文学に直接の顕著な影響を与えるようになった戦後の世界では、文学者も、またそうでない人々も、自身の好む時間・空間の中に生きることができるようになった。状況の許す限り、想像力によって、何処に、どの時代に生きることが自由である。現実にはべったりと貼り付いた時間・空間は退屈極まりないとする現代人は多い。

十八世紀のイタリアを愛し、「そこに生きて」詩・小説を書いたレニエに倣って、化政期の江戸を愛し、「そこでのみ生きる」ことにどんな慮りが要るであろうか。

4年のアメリカ滞在、10ヶ月のフランス滞を終えて1908年7月、荷風は帰朝する。それでも未だ若かった28歳の荷風が世に問うた本当のものは、作家としての姿勢であり、信条であった。そして自然主義に倦んでいた世間の人々のすべてがこのことに気づいたかどうかはともかく、この作家は熱狂的な歓迎を受ける。

帰朝した荷風の書いた一連の作品は、ヨーロッパの活きた文学の紹介ともいえるものであった。「深川の唄」を読んだ久保田万太郎が、「急に目のまえが、豁然と、ひらけたのを……いいえ、もつとそれ以上に、はじめて自分の生活の夜のあけたやうなときめきを感じた。」¹¹⁾と述べているのは慧眼である。

「深川の唄」は帰朝後の信条を示す随想風の作品であり、帰朝の翌年に執筆され刊行された『すみだ川』は中編の小説である。この作品は吉田精一(1908-1984)等によって、レニエの1903年に *Mercure de France* から刊行された“*Les Vacances d'un jeune homme sage*”の影響が色濃いとされ、それが定説となっている。主人公ジョルジュ・ドロヌは大学入学資格

試験合格を目指している16歳の少年である。少年は夏の長い休暇の間に、はじめは両親の供をして行った先で知り合ったド・ラ・ブルリ夫人やデスクララグ未亡人等、年上の女性達と交際し、恋の戯れも知り、失恋も味わう。作者は序言でこう述べる。

Ce sont des figures plaisantes et naïves que l'on rencontrera dans ces Vacances d'un jeune homme sage. J'ai tâché de les dessiner avec vérité. Je les crois vraies, mais il ne faudrait pas les croire réelles. Elles ne le seront qu'autant qu'elles vivront dans la mémoire de ceux qui auront bien voulu feuilleter ces pages familières. Qu'elles les aident à se souvenir, car ils y trouveront rapportés quelques-uns des petits événements qui, à quinze ans, nous émeuvent le plus et qui, plus tard, nous font sourire, comme on sourit du passé, avec regret et mélancolie.

十五歳の遙かな昔を振り返り、そこに現代の風潮に無批判に漬かってはいない作者と主人公とを重ね合わせるところは、荷風とレニエとは同じである。またそれぞれの作品の主人公ジョルジュと長吉は、いずれも十五六歳という若い身空でありながら、絶えず過去を偲んでいる。つい数日前のことですら、過去という衣をまとったものであれば、そこに価値が生じると、彼らは感じている。

また作品の見せ場は、“Les Vacances d'un jeune homme sage”が、恋の歓喜・悔恨・憂愁などであり、極めて若いこの主人公にも、人生の複雑な苦さが、恋を通して身にしみるのである¹²⁾。マドマゼル・ウージェニーという、いかがわしい女性を訪れたのを両親の知人に見られたジョルジュは、両親からそれとなく依頼されたデスクララグ未亡人の質問を受ける。この作品の終わりに近い場面である。

—Et c'est tout Georges ?

—Oui, je devais y retourner demain.

— Vous la regrettez ?

Les yeux de Georges se remplirent de larmes.

—Elle est jolie ?

Il fit signe que oui.

Ils étaient assis côte à côte sur le banc.

Mme d'Esclaragues se pencha. Elle mit sa main sur l'épaule du jeune homme et doucement, par le cou, elle lui tourna la tête vers elle.

— Plus jolis que moi ?

Ils se regardèrent. Georges sourit. Il vit Mme d'Esclaragues approcher son visage du sien. La bouche tendue toucha la sienne et ferma les yeux.

この恋のもつれは、ちょうどカンヴァスの枠から故意にはみ出して描かれた画のように、作品からはみだして、どう続いて行くのか、読者にその行く末を見定めたい思いを抱かせる。一般向けのフィクションでもなく、後年流行したいわゆる推理小説でもない、独特の高雅な小説でありながら、こうした思いを抱かせる作品は、希であろう。

『すみだ川』では、確かに長吉の幼なじみのお糸への思いも重要ではあるが、さらに重用なのは長吉の三味線弾きになりたいという望みが、母親の強い反対によって叶えられそうにもないという設定である。唯、伯父の俳諧師羅月宗匠だけが長吉の理解者である。そして生粋の下町育ちで、江戸伝来の文化を熱愛する長吉の感性こそ、此の上ないものとして縷述される。『すみだ川』の中心はこの縷述であろう。長吉は中学生であるが、ある日、学校に行かず、芝居小屋に足を向けてしまう。

長吉は観劇に対する此れまでの経験で「夜」と「川端」と云ふ事から、きつと殺し場に違ひないと幼い好奇心から丈伸びをして首を伸ばすと、果せるかな、絶えざる低い大太鼓の音に例の如く板をバタバタ叩く音が聞えて、左手の辻番小屋の蔭から仲間と塵を抱えた女とが大きな声で争ひながら出て来る。見物人が笑った。舞台の人物は落したものを捜す体で何かを取り上げると、突然前とは全く違つた態度になつて、極めて明瞭に浄瑠璃外題梅柳中宵月、勤めまする役人……と読みはじめる。それを待構へて彼方此方から見物人が声をかけた。再び軽い拍子木の音を合図に、黒衣の男が右手の隅に立てた書割の一部を引取ると袴を着た浄瑠璃語三人、三味線弾三人が、窮屈さうに狭い台の上に並んで居て、直ぐに弾出す三味線からつづいて太夫が声を合してかたり出した。長吉はこの種の音楽には、いつも興味を以て聞き馴れてゐるので、場内の何処かで泣出す赤児の声と其れを叱咤する見物人の声に妨げられながら、而も明に語る文句と三味線の手までを聴き分ける。

ここには、異文化の中に殆ど孤独な状況で入り込んだ異邦人が、その異文化の中心ともいふべき極めて特異な場に居合わせた体験を叙述する方法に似たものがある¹³⁾。

帰朝間もない、熱狂的な歓迎を受けた中で書かれた一連の日本回帰の作品の中でも、特に「江戸回帰」ともいふべき作品は、それぞれ様式を異にした「深川の唄」・『すみだ川』・『冷笑』であろう。これらの作品には、東京を、否、江戸を江戸たらしめている水の流れへの偏愛がある。芝居小屋も狂言の筋も、水の流れを離れては成り立たない。

新帰朝者の若い作家への世間の熱狂が一段落した後、荷風の作品の中には、山の手も登場する。しかしそこに出てくるのは、大きいが掃除の行き届かない埃っぽい玄関のついた家と、そこに住む俗悪な人物であるか、あるいは庭木や薬草が生い茂る中、隠者のように暮らす旧幕以来の学者の子孫で、父禾原を理想化したような人物である。

これに対して水の流れを伴う情景は、それがあまりにも慎ましく哀れなものではあっても、浮世絵に現れた美意識の助けを借り、新進作家の自信をこめて描写される。エッセーに近い作品である「深川の唄」には、『すみだ川』の前述の場面の補強をなすような叙述がある。

人通りは殆どない、もう四時過ぎたかも知れない。傾いた日輪をば眩しくもなく正面に見詰める事が出来る。此の黄味の強い赤い夕陽の光に照りつけられて、見渡す人家、堀割、石垣、凡ての物の側面は、その角度を鋭く鮮明にしては居たが、然し日本の空気の是非なさは遠近を区別すべき些少の濃淡をもつけないので、堀割の眺望はさながら旧式の芝居の平い書割としか思はれない。それが今、自分の眼には却つて一層適切に、黙阿弥、小団次、菊五郎等の舞台をば、遺憾なく思ひ返させた。あの貸舟、格子戸づくり、忍返し……。

荷風の当時の読書を探ると、1909年2月には“Les Rencontres de M. de Bréot”を繙き、この年の秋にも作品は不明ながら、何回かレニエの著作を読んでいる。「深川の唄」が『趣味』に載ったのも同年2月であるが、『すみだ川』は同年8月に起稿され、10月に脱稿されている。明らかな記述はないが、『断腸亭日乗』の前編の役割を持つ、留学時代、すなわち『西遊日誌抄』の時代から、荷風がアンリ・ド・レニエの著作を識り、繙いていたことは推測できる。読書家の中でも特に、自著をも含めて、愛好する書を何度も読むのが荷風の嗜癖である。なお『冷笑』は1909年12月から翌年2月にかけての、新聞連載小説である。

『冷笑』は、本来、どのような範疇に入れるべき作品であるか、分からない。全編、現代の用語でいえば、比較文化論といってもよい、議論に終始する小説である。その中にも、水は、江戸の文化を象徴するものとして、また「深川の唄」と『すみだ川』とこの『冷笑』を貫くものとして、議論の中心に顕れる。小山銀行の頭取小山清という、日本のこの種の人間としては教養

も趣味もある人物が中心になって、職業を異にする数人の人物に交友の輪が広がる。吉野紅雨は新時代の小説家、中谷丁蔵は狂言作者、二人は以前からの友人である。

今日も猶清元が「神田祭」に伝へて居るやうな祭礼の晴れた日には都会の大道にはいかに目覚しい色彩と愉快なる音楽と、其れに伴ふ民衆歓喜の聲が沸騰したであらう。巴里人の風流が郊外の緑陰に料理屋を建てて居るならば、江戸の人は其れをば好んで溝渠のほとりに択んだ。洒洒たる屋根舟の往来する隅田川の昔を思へば、何ぞ徒に今日のセーヌ河を羨まうや。嘗ては武士の一語が動しがたき道德的威厳を持つて居た事を記憶せば何ぞ独り現代英国のセントルマンのみを賞する必要があるであらう。ああ江戸時代なるかな。

ああ江戸時代なるかなと云ふこの感激は、相互から不思議な親しみを以て、帰朝以来一度離れやうとした紅雨と中谷さんとの間を以前のやうに結びつけたのであつた。その日亀井戸まで歩いた夕方には紅雨は中谷の発意で尾上菊五郎が愛好したと称せられる柳島の橋本屋で晩酌を傾けた。

この風流を旨とするグループに、大実業家の息子で、親との折り合いが悪く、外国航路の船の事務長をしている徳井勝之助という人物が仲間入りをする。

徳井は、久しぶりに帰国しても親の家にはあまり寄りつかない。外では大実業家として重んじられている父が家では横暴な家長で、その姿に日夜接するのに耐えられないからである。帰国した時、徳井は停泊中の船中か横浜のホテルで日を送り、ひたすら出港の日を待つ。ある冬の日、小山は正餐の趣のある昼食に彼等を招く。この席で紅雨は徳井の議論は平凡であると思つたが、「唯勝之助の鉄色した額と頬の血色が遠い海洋の風に染められた名残だと思ふと、かの明るい熱帯の港の景色、其処には異様の植物や果物や宝石や織物の色彩が、異様な言語と船歌の聞える波止場の強い日光の中に輝き動

いてゐるさまの思ひやられて、勝之助の人物が云ふに云はれず神秘らしく見えた」ことに興味を感じる。

実は小山はこの交友の輪を、今様八笑人に見立てている。出来れば八人の輪としたいのであろうが、終章まで、それは叶えられない。唯、この長編の終章近くになってはじめて、高名な日本画家の息子で自身も日本画家である桑島青華という人物が登場する。彼も水のほとり、向島に居を構えている。青華はパリ滞在の体験もある人物であるが、父の遺した屋敷で典型的な文人風の生活を送っている。紅雨の父と生前の青華の父とは漢詩を通して交友があった。紅雨は父に青華を訪ねるようにと云われると、その住居が河の畔ということに魅かれて、すぐに訪れることにする。その時、紅雨はこう連想する。

紅雨は江戸趣味の追懐で、「待乳沈んで」とか「橋場今戸の朝煙」とかさざまな歌曲から、いかに現在は製造所の煉瓦造や煙突で俗化されても、其の懐しきは決して消えやらぬ隅田川。都市を両断して流れる事から訳もなく自分勝手にこじつけてセーヌ河の上流の如くにも思ひなす隅田川の風景を、忽ち眼の前にそが空想の色彩を加へて实景よりも更に美しく、自己の趣味に適合するやうに描き出した。

この風景と心理の関係こそ、現代に生きる少壮の研究者オーギュスタン・ベルクの分析に、まさに適合するところのものである。そしてレニエとヴェネチアとの関係も同様である。紅雨は自身の心理を、直接に投影させることの出来る青華の人物と、その住居に終始深い満足を覚える。そしてそこを去る時も河から行くが、その情景はつぎのように描写される。

汽船の切符を買って棧橋に下りて見ると、風のあるにも係はらず、河水の面は非常に滑で、見渡す景色は何処となく色薄く疲れたやうにぼつとしてゐたが、吾妻橋に近い丁度花川戸あたりの人家の上に、高く掛つた日輪ば

かりは真赤に濃く輝いて、焰のやうな反映をば長く斜に河面を越して、棧橋の水際まで漂はしてゐた。

これは荷風が「深川の唄」でも使っていた、荷風の述べるところによれば、浮世絵にある風景にそっくりな景色である。遠近描写の無い浮世絵の風景は、極めて湿度の高いこの国の大気の中では、むしろレアリテに富むと見るのである。

レニエの現代を舞台とした小説の代表作のひとつ“Le Passé Vivant”は、1905年に *Mercur de France* から刊行されている。荷風が1909年2月以前にこの著を読んでいることは確かである¹⁴⁾。常に現代を批判し、過去の世紀を夢見て暮らす若いジャン・ド・フラノワと十八世紀の研究に余念のないシャルル・ロオヴローがこの小説の経緯を創り、大革命の批判者である保守主義者のジャンの父ド・フラノワ伯爵、イタリア貴族でバロックとロココの愛好者チェスキーニ伯爵等が彼等に加わって登場する。登場人物が、常に、倦むことなく文化論を展開して議論する有様は、『冷笑』に近似している。唯、青年時代にパリにやって来たチェスキーニ伯爵とド・ローモン侯爵夫人の生涯を貫く大恋愛の代わりに、狂言作者中谷の女性遍歴が語られることに象徴されるように、『冷笑』の人物は江戸の世界から出られない。

レニエの作中の人物は、パリにいる時でも、常にヴェネチアを思い、何かというと、直ぐにヴェネチアを訪れ、この水都にあっては必ず過去の追憶に耽る。“Le Passé Vivant”の第13章にはつぎのようにある。

Lauvereau vivait à Venise, comme il le disait à Jean de Franois, «casanovesquement».

A la suite de son héros favori, il parcourait avidement la ville. Elle n'avait guère changé depuis l'époque où Casanova paradait sous les galeries des Procuraties. Sur la place de San Giovanni et Paolo, la statue du Colleone était toujours là, au pied de laquelle

la belle nonne venue en gondole du couvent de Murano rejoignait son amant. La Piazzetta, d'où il s'embarquait pour Corfou ou Fusine, baignait toujours ses marches de marbre dans l'eau marine de la lagune. Ce petit pont, près de ce canal, était certainement l'endroit où, une nuit, il avait batonné Razzetta. Ce puits sculpté du Campo San Angelo était celui dont il avait déplacé, une nuit, la table de pierre, à l'époque où, petit violon au théâtre San Samuele, avant d'avoir rencontré M.de Bragadin et de lui avoir fait la cabale, il menait mauvaise vie et terrorisait le quartier par ses farces nocturnes.

このような形で、旅にあっては過去の人物の足跡を辿り、過去に思いを馳せ、過去に生きた、あるいは実在の、あるいは架空の人物の心理の襲までも知ろうとするのは、フランス文学の得意とするところである。また比較文学・比較文化学・文化地理学的な思考方法も、フランス文化の中に早くから定着している。

旅は人を解放し、日常生活に在る時よりもずっと自由に異なる時間・空間に精神を遊ばせる。人は旅に在ってはじめて、いわば時間の層、時間の堆積に触れることが出来る。アンリ・ド・レニエが、詩人として名をなしただけでなく、一時期、その現代小説が非常に流行したことも、フランス人の旅の型と旅における心理の有り様を考えれば、肯ける。

隅田川は東京を山の手と下町とに二分する。山の手から川を渡って下町に行くことに、荷風は特別な意味を感じていた。そして川の畔の下町の生活にこそ、人間の真実があると思っていた。同時にそれは、自身山の手で育ち、今も山の手の間であるからこそその認識であることも識っていた。

オンフルールという、多くの画家の眼が注がれた漁港に育ち、長じてパリに出てもセーヌ河畔を愛し、やがてヴェネチアを見出したのがレニエである。レニエは詩人・小説家として拠って立つところのものをすべてヴェネチアに求めようとまでした。荷風がレニエから学んだことは深い。荷風はその文学

観・都市に対する見方・過去への追慕・現代文明の批判等、自身を小説家たらしめているところの殆どすべてを、レニエに負っている。

この小論に見た『すみだ川』、「深川の唄」、『冷笑』からおよそ三十年の後に書かれた

『溷東綺譚』に、ピエール・ロティの影響の色濃いことは明白であるが、荷風一代のこの傑作におけるアンリ・ド・レニエの影響も論じられなければならない。

注

- 1) Augustin BERQUE フランス国立社会科学高等研究院教授。文化地理学専攻。
- 2) 鯉丈は『八笑人』の中で、春夏秋冬の行楽を並べ、例えば「春庚辰ハ飛鳥山の花の雲 夏壬午年ハ高田の里の螢がり」というように、出版を予告している。
- 3) 『春色梅児誉美』をはじめとして、いずれも天保年間に刊行された一連の作品の総称が『春色梅暦』である。
- 4) 当初この学校は東京外国語学校と称していたが、1885年、このように変更された。二葉亭四迷等はこの措置を不満とし、変更当時に退学している。
- 5) 荷風の日誌には『断腸亭日乗』以前にも『西遊日誌抄』がある。なお『断腸亭日乗』は1917年9月16日から死の前日の1959年4月29日まで、42年間にわたって書き続けられた。
- 6) 『海潮音』の訳詩の本質は、専門の訳詩家による訳詩であり、訳そのものが傑出している。
- 7) 「モーパッサンの石像を拝す」よりの引用。
- 8) VILLE DE FRANCE
- 9) Lorsque la nuit qui vient rend les choses confuses
Et que sonne la route dure au pas égal,
Et qu'on écoute au loin le gros bruit de l'écluse,
Et que le vent murmure aux arbres du canal;

Quand l'heure, peu à peu, ramène vers la ville
Ma course fatiguée et qui va voir bientôt

La première fenêtre où brûle l'or de l'huile
Dans la lampe, à travers la vitre sans rideau,

Il me semble, tandis que mon retour s'empresse
Et tâte du bâton les bornes du chemin,
Sentir dans l'ombre, près de moi, avec tendresse,
La patrie aux doux yeux qui me prend par la main. (La Sandale ail
ée)

10) FRONTISPICE

Sur l'eau verte, bleue ou grise
Des canaux et du canal,
Nous avons couru Venise
De Saint-Marc à l'Arsenal.

Au vent vif de la langue,
Qui l'orient à son gré,
J'ai vu tourner ta Fortune,
O Dogana di Mare!

Souffle de l'Adriatique,
Brise molle ou sirocco,
Tant pis, si ton doigt m'indique
Fusine ou Malamocco!

La gondole nous balance
Sous le felze, et, de sa main,
Le fer coupe le silence
Qui dormait dans l'air marin.

Le soleil chauffe les dalles
Sur le quai des Esclavons;
Tes détours et tes dédales,
Venise, nous les savons!

L'eau luit; le marbre s'ébrèche;
Les rames se font écho,
Quand on passe à l'ombre fraîche
Du Palais Rezzonico.

- 11) 「『深川の唄』解説代りにしるす」より。
- 12) レニエは“Les Vacances d'un jeune homme sage”の扉に，“Il n'y a plus d'enfants…… VIEUX DICTION”と記している。
- 13) 帰朝の前後、荷風はレニエとともに、ロティを盛んに読んでいる。ロティの例えば“La troisième jeunesse de Madame Prune”の中の日本の描写にそれが顕著にある。
- 14) 荷風は1909年2月25日付の毎日新聞に「レニエの詩と小説」を寄せ、この作品に言及している。

Kafu Nagai et Henri de Régnier

Masako AKASE

Kafu Nagai connut une assez longue carrière d'écrivain à succès. . Il naquit dans le quartier résidentiel de Tokyo en 1879 et y mourut en 1959. Son père Kagen Nagai, était fonctionnaire et à la fois, l'un des fameux poètes écrivain dans le style chino-japonais. Son mauvais fils Kafu le révoltait et soulevait toujours sa désapprobation. Kagen estimait en effet qu'un honnête homme se devait tout d'abord d'être fonctionnaire et que par ailleurs, on pouvait devenir poète amateur. Secrètement, le jeune Kafu devint petit artiste de boîte de nuit et petit dramaturge de théâtre traditionnel où il était loin d'être mauvais. Pendant ce temps, il apprenait la littérature européenne, la langue anglaise et la langue française.

Ses premières oeuvres "Sudaré no Tuki" et "En Koi" furent publiées en 1898, lorsqu'il avait 18 ans. De 1902 à 1903, il écrivit "Jigoku no hana" et "Yumé no onna", deux ouvrages qui lui permirent de parvenir à la célébrité. Après un long séjour aux Etats-Unis et en France, il retourna dans son pays natal, comme écrivain de la nouvelle vague. Il avait 28 ans.

Après son retour, de 1908 jusqu'à 1959, soit presque pendant un demi-siècle, Kafu vécut comme un grand écrivain et grand bibliophile. Il recevait des influences profondes de la littérature française et appréciait surtout les oeuvres d'Henri de Régnier. Sa pensée, son style de vie, son amour pour le passé et sa passion pour Venise,

tout cela l'attirait chez cet auteur français.

Kafu aima beaucoup la rivière Sumida (Sumidagawa). A Tokyo, elle sépare les quartiers résidentiels des quartiers populaires. Toute sa vie, Kafu adora les quartiers populaires ; il estimait que la vraie vie ne pouvait exister que dans de tels endroits. Ainsi, il appréciait tellement de franchir les ponts de cette rivière, sur le plan réel mais également sur le plan symbolique. Durant toute sa vie, il aima l'eau et se promenait souvent en recherchant la source d'un fleuve ou d'une rivière.

Kafu était un critique de la civilisation moderne de tout premier ordre et en avait appris les fondements avec les méthodes d'Henri de Régnier.